

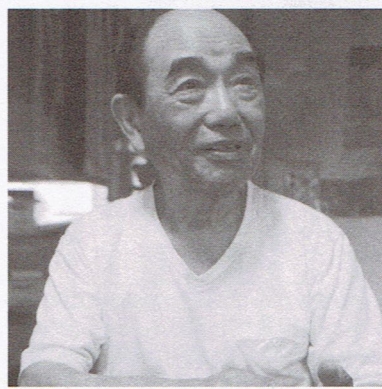
和紙 だより

目次

越前和紙への提言 浅野昌平さん
 ショップレポート ビケモン
 レポート 越前和紙の里の偽札製造計画
 情報欄

4 3 2 1 頁

越前和紙への提言

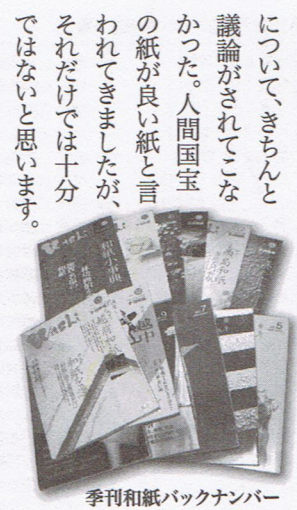
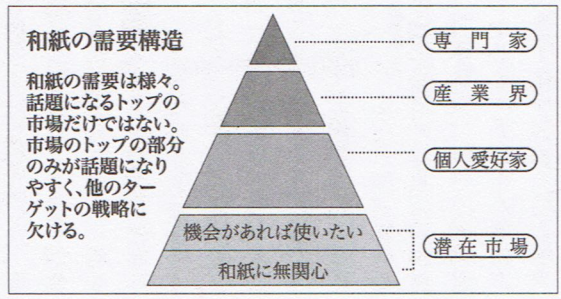


■浅野 昌平(あさの しょうへい)
 1931年東京生まれ。1988年、それまで一般人にわかりにくく、全体像が捉えにくかった和紙の知識や製法、科学、用途、産地情報などを伝える「和紙の手帖」、和紙専門誌「季刊和紙」の企画・編集に、全国手すき和紙連合会と共に携わる。全国の和紙を集める「わかみ堂」(東京都文京区)を営む傍ら、和紙の印刷、手漉き和紙カレンダー、手漉き和紙の見本帖製作、「和紙文化辞典」の企画・出版。全国手すき和紙連合会アドバイザー、和紙文化研究会会員。
<http://wagamido.jp/>

■浅野昌平さん「わかみ堂」店主、和紙コンサルタント)
 「和紙戦略の組み立てはこれから」

●捉えにくい和紙業界の全体像

よく和紙セミナーなどのしめくりで、使い手は「いい紙を残して」と求め、漉く側は「どんなことがあっても伝統を守ります」で終わります。しかし、この議論は日本の和紙の市場をピラミッドに例えるなら、トップの紙のことを話題にしている、他の市場の話が抜け落ちていきます。和紙市場の全体像が見えにくいのは、歴史的な理由があります。江戸時代まで、紙は大名が藩の財源のために紙漉きを奨励し、農民に作らせ、換金した。当時の流通の中心、大坂での商品の取引量は、一位：米、二位：材木、三位：和紙です。競争が激しく、製法はいわば企業秘密でしたから、紙漉きを習いに来た者が山を越えたら殺されたとか、製法を漏らせば打ち首、紙漉き一揆も沢山起きています。明治になってからも紙漉き技法を守るための風習は各地に残り、家族以外の者は漉き場にみだりに入ってはいけない、よその漉き場を見に行かないなどの暗黙の掟がありました。もう一つは、「何がいい紙なのか？」ということ



季刊和紙バックナンバー

越前和紙の岩野平三郎氏は「一般的にいい紙と評価が違います。目的に合う紙をそれぞれの伝統技術で漉くのでみんな違う紙になる」と言っています。和紙に洋紙という競争紙が現れた明治は、封建的な生産機構からいきなり資本主義競争の世界に入れられ大混乱の時代でした。何とか産地ごとにはまともになりましたが、業界として対応する意識や時間もありません。今日に至っているのが実情ではないでしょうか。

●和紙の近代史がない

明治以前の紙漉きは、藩の財源に農閑期農民が副業で紙を漉かされたのであり、専業で紙を漉くようになったのは明治三年、農民の職業の自由が保障されてからです。明治以前の一軒の生産力と現在の一軒を棒グラフで比較して「現在の和紙の危機」の根拠にするのは実態を表すことになりません。

また、現在の産地の紙漉きの主流は、明治以降土佐和紙の吉井源太氏が唱えた漉き方が中心です。昭和初期、民芸運動の柳宗悦が「質を失えば総てを失う」と批判した漉き方です。昔は漂白剤は使わず、川晒しでしたし、ビーターを使わず、手で叩解した。乾燥も板干しでした。質桁も大きくなり、一・三判ができたのは明治以降のことです。それ以前はなかった。本美濃の

産地でも吉井源太方式を取り入れるのに、大論争しているのです。百年経つとそれも「伝統」となる。労働を軽減し、多様な紙が漉けるようになった点では、吉井源太方式もプラスの面が大きい。

●オリンピックに向けて和紙を
和紙は軽くて、強くて、柔らかい素材です。かつて、柿渋・油・こんにやく粉などの力を借りて和紙の用途を大幅に増やしました。繊維、ガラス、樹脂、フィルム、アルミニウムなど、素材とのコラボレーションで用途開発は広がります。生活用材だけでなく工業用材としても可能性を持っており、世界の人々と和紙を使う生活の喜びを共有できる時代がきました。

新潟県の朝日酒造の清酒「久保田」はいい事例です。売上げが順調に伸び、越後の三つの漉き場は耳付きラベルの安定生産が確保できています。その間、幾つかトラブ



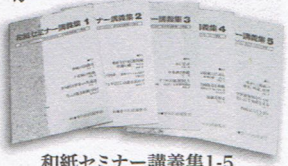
長年の経験を生かした大判和紙の試作印刷を広げる浅野氏

の責任を和紙に求めず、それを加工する側に改善を求めた。増産により、手貼りしていた耳付きラベルを機械で貼れる紙への変更を求めた瓶メーカーに、時間を与えるから貼れるように改善してくださいと相手側にボールを投げ返しています。その結果、手造りの良さが生かされた「久保田」のラベルは、更なる売り上げに貢献することができた。



辞典著者 康生 文庫判・和紙久米A5製入り箱

和の良さが世界的にも認められてきている昨今、鉄筋コンクリートのビルやホテルにこそ柔らかない空間を演出できる障子や和紙がいい。高齢者施設や介護施設、公共建築には積極的に使ってほしい。そして日用品や趣味のものに和紙を使い、日本人の生活が素敵だと感心させられるようになると嬉しいですね。



和紙セミナー講義集1-5

各々の和紙の産地は色々経験を積んでいます。バラバラでは力が出ません。私は、二〇二〇年のオリンピックを、産地の垣根を越え、二十一、二十二世紀に向けた何か和紙の新しい産業の確立を目指す契機にできないかと、全和連にも呼びかけを始めたところ。何世紀にもわたって生き続ける和紙は未開発の素材であり、これからののです。



和紙サンプルが並ぶ店内

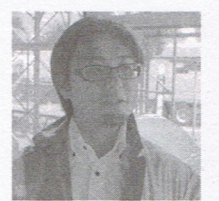
■ PIGMENT (ピグモン) 和紙など日本ブランドの良質画材を取り揃えたラボ

● 文化・芸術の「保存・保管」事業

本年七月、東京都品川区の運河沿いの街、天王洲アイルに日本画を始め東洋系の美術に使われる伝統画材を売る「PIGMENT」がオープンした。Pigmentとは「顔料」という意味。フランス語読みの「ピグモン」と呼称する。

ピグモンは、寺田倉庫(一九五〇年創業、売上高約一六〇億円)の社長直轄「アート事業部企画プロジェクト」として運営。同社は、「物を預かる」だけの大手倉庫業とは一線を画し、「保管・保存のプロフェッショナル」として、専門性の高い温度や湿度管理の必要なものを保管することで差別化を図ってきた。食糧庁指定の米の管理から始まり、美術品、ワイン、映像フィルム、などを保管する事業の顧客は、画廊などの法人を始め、専門家や一般客などの個人にまで及ぶ。本社のある天王洲アイル区域の地域活性化を目的に、文化・芸術事業にも積極的だ。

近年、東洋画材は中国や台湾では良質の画材が手に入らないと、日本に買いに来る芸術家も多い。また関西を中心とする歴史ある日本画材メーカーでは、少子化や美術人口の減少、伝統技術を受け継ぐ職人不足のため、生産が落ち込んでいる。日本ブランドのいい画材を国内外に紹介し、東洋系美術を底上げ、若手の育成に寄与できる拠点を提供するのがピグモンの狙いだ。伝統的な画材・製法を後世に継承する、いわば文化・芸術の



店長の岩泉慧さん

を継承する、いわば文化・芸術の

「保存・保管」事業と位置付けている。

● 知識豊富なスタッフ

二〇〇㎡の店舗のデザインは建築家、隈研吾氏。竹や和紙などの自然素材を中心とした内装に、博物館のように美しく陳列された画材が目を引く。作品の完成形の色をイメージしやすいように、ライティングにも気を配っている。

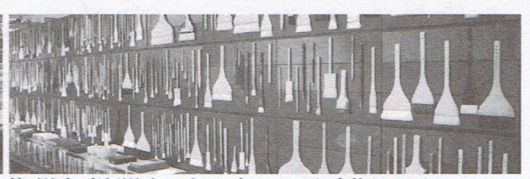
扱う画材は、四五〇〇種類、二万点。和紙、キャンバス、布、パネルなどの「基底材」、古雅墨・大和雅墨・百選墨・彩墨などの「墨類」、顔料・アクリル絵具・金箔・岩絵具・胡粉などの「色材」、膠・カゼイン・メデイウム・添加剤などの「展色剤」、硯・絵皿・筆・刷毛・裏打刷毛などの「道具類」などで、隣のビルにはギャラリーも併設されている。

PIGMENTの取り扱い和紙一覧

楮紙 未晒 5匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 未晒 10匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 未晒 15匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 未晒 20匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 5匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 10匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 15匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 20匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 未晒 ドーサ 10匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 未晒 ドーサ 15匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 ドーサ 10匁【菊判】	福井 山喜製紙所
楮紙 晒 ドーサ 15匁【菊判】	福井 山喜製紙所
雁皮紙 晒 2枚合【菊判】	福井 山喜製紙所
楮×三椋二層紙 未晒【菊判】	福井 山喜製紙所
楮×三椋二層紙 晒【菊判】	福井 山喜製紙所
雲肌麻紙 3.6判	福井 岩野平三郎製紙
雲肌麻紙 5.7判	福井 岩野平三郎製紙
雲肌麻紙 7.9判	福井 岩野平三郎製紙
白麻紙 3.6判	福井 岩野平三郎製紙
白麻紙 5.7判	福井 岩野平三郎製紙
白麻紙 7.9判	福井 岩野平三郎製紙
新麻紙 3.6判	福井 岩野平三郎製紙
新麻紙 5.7判	福井 岩野平三郎製紙
新麻紙 7.9判	福井 岩野平三郎製紙
楮×三椋二層紙 3.6判	福井 岩野平三郎製紙
楮×三椋二層紙 5.7判	福井 岩野平三郎製紙
楮×三椋二層紙 7.9判	福井 岩野平三郎製紙
竹和紙 水墨画用56×76cm	徳島 アワガミF.
竹和紙 水墨画用ロール	徳島 アワガミF.
竹和紙 水墨画用アートパッド色紙	徳島 アワガミF.
竹和紙 水墨画用アートパッドSM	徳島 アワガミF.
竹和紙 水墨画用アートパッド葉書	徳島 アワガミF.
竹×楮 混合紙菊判	徳島 アワガミF.
富士楮ロール10g	徳島 アワガミF.
富士楮ロール3g	徳島 アワガミF.
富士楮ロール5g	徳島 アワガミF.
典具帖ロール9g	徳島 アワガミF.
典具帖ロール3.8g	徳島 アワガミF.
小国和紙 晒晒8匁【菊判】	新潟 小国和紙生産組合
小国和紙 晒晒10匁【菊判】	新潟 小国和紙生産組合
小国和紙 晒晒8匁【大判】	新潟 小国和紙生産組合
小国和紙 晒晒10匁【大判】	新潟 小国和紙生産組合



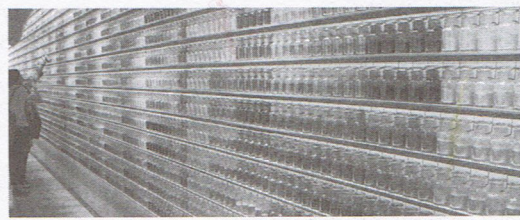
和紙のインテリアが落ち着いた雰囲気ワークショップスペース 筆・刷毛・裏打刷毛のディスプレイはそれぞれ自体がアート



筆・刷毛・裏打刷毛のディスプレイはそれぞれ自体がアート

ターゲットは、日本画、水墨画などのプロのアーティスト、その予備軍である美大生、アート研究者、趣味で描く一般のディーユーザなど。中国、台湾から来るアジアのアーティストや日本美術に興味を持つヨーロッパの人も訪れるが、意外に一般の人の関心も高いという。美術大教授や画材メーカーによるワークショップも開催予定。個人で所有するには高い表具用の刷毛なども、今後は時間貸しでレンタルでき、スタッフの指導を受けるようなこともできるという。オープン一ヶ月で、一日四〇〇五〇人、一ヶ月で千人弱の人が訪れた。見たこともない日本画材を目にし、硯や墨の話をもっと聞きたい、水墨画を習ってみたいという若い人も多いそうだ。

同店の最大の強みは、専門知識の豊富な画材のエキスパートが、画材の特性や使用法をアドヴァイスしてくれることだ。お話を伺った店長の岩泉慧さんも美術大学に講師として籍を置き、ご自身も日本画家でもある。「岩絵具は比重で分離してしまいうため、絵皿上での混色は難しく絵の上で重ねていく」「中国の硯は石の目が複雑で、墨色や滲みの面白さが出る」「日本の墨は底色が多様で青系、赤系などレンジが広い」など、興味深い説明がポンポン出てきて、和紙が使われる創作現場の話



顔料・アクリル絵具・金箔・岩絵具・胡粉などカラフルな瓶が並ぶ

も聞くことができ、日本画に門外漢の我々にも大いに勉強になる。

●和紙の品揃え

和紙の品揃えは、明治期より名だたる日本画家に愛されてきた越前和紙、岩野平三郎製紙所の雲肌麻紙、白麻紙を始め、同じく版画用紙が得意な山喜製紙所の未晒や晒生の

楮紙や雁皮紙、徳島県アワガミファクトリーの竹和紙、楮や典具帖のロール紙、新潟県小国和紙の雪晒し楮紙など。三楳と楮を合わせ漉きにした二層紙は、筆滑りの良さと丈夫さを兼ね備えたビッグモンオリジナル企画。本画仙紙に劣らず墨色が美しく出る水墨画用に開発した竹和紙もオリジナル企画で、ノート状の三種類のサイズと56cm×76cmのシート状のもの、1.1m×10mのロールがあり、現在一番の売れ筋だ。和紙は、多少高価なものでも紙や製法の特長をきちんと説明すると、お客は買っていくという。「今後仕入れていく和紙は実際産地を回って取材し、作られる過程や作り手の思いもFACEBOOKやブログなどで伝えながら売っていきたい」と岩泉さんは語る。今後、特注和紙の分野も考えられるという。通販も行っており、ウェブサイトに日本語・英語・中国語に対応している。

住所:東京都品川区東品川2-5-5 TERRADA Harbor One 1F
電話番号:03-5781-9550 営業時間:11時~20時(月曜・木曜定休)
PIGMENTの最新情報はFACEBOOKページ「Art by Terrada」で更新しています。公式サイトは「PIGMENT」で検索。

レポート

■越前和紙の里の偽札製造計画 「今明かされる終戦秘話」

「越前和紙を愛する会」主催の越前千年紀ロマン塾では、八月二十六日、終戦七十周年企画として、近年明らかになってきたアジア太平洋戦争末期の登戸研究所第三科(偽札製造部門)の越前疎開を取り上げた。神奈川県川崎市にある明治大学平和教育登戸研究所資料館の定期的な見学会から興味を持つようになったという講演者の伊



講演者の伊与登志雄氏

与登志雄氏(福井新聞社武生支社長)は、ほとんどの資料が残っていない秘密裏に行われた第三科越前疎開の一九四五年四月〜終戦の八月までの様子を、当時の職員や地元関係者などに聞き取り調査。越前で準備されていた偽札製造計画、経緯、顛末の秘話が明かされた。

●登戸研究所とは

旧日本陸軍の登戸研究所は、近代戦には付き物の謀略戦とその兵器開発を目的に、一九三七年(昭和十二年)十一月、川崎市生田区(現在明治大学生田キャンパス)の隔絶された丘陵地に、「陸軍科学研究所登戸実験場」として開設された。幾度かの組織改編を経て、一九四二年十月には正式名称「第九陸軍技術研究所」(通称「登戸研究所」となる。最盛期の一九四四年には、十二万坪もの敷地に約百棟の建物を有し、技術将校・技師・技手などの幹部所員二

五〇名、一般職員・工具合わせて総勢二〇〇〇名が働いていた。所内には庶務科の他、第一科…電磁波攻撃・気球爆弾、第二科…毒物・細菌兵器・スパイ用機材、第三科…偽札製造・偽造パスポートなどの開発にあたり、第四科は研究品の製造・補給を担った。十カ所あった他の陸軍技術研究所と違い、同研究所は、天皇直属の参謀本部だったため、政府機関のやり方に縛られず自由に研究・開発ができた。この組織を考案した軍事課課長の岩畔豪雄(いわくろひでお)大佐は、陸軍中野学校を設立した人でもある。

●第三科の偽札製造

第三科は、科長に山本憲蔵大佐、その下に王子製紙の技師、伊藤寛太郎少佐を引き抜き、北方班・製紙・透かし、中央班・製版、南方班・印刷・インク、研究班・分析・鑑識に分かれ、主に中国でばらまく偽造紙幣の開発を行った。大きな印刷機械も設置でき



中国紙幣の偽札見本

る西洋トラス構造の屋根を持つ第三科の木造平屋建ての建物は高い塀で仕切られ、戦中・戦後を通じて「秘密中の秘密」であり続けた。一九三九年、日中戦争の長期化に伴い、山本大佐は「対支経済謀略実施計画」を立案。目的は、偽札で中国紙幣「法幣」の信用度を落とし、大量に偽札を流通させることでインフレを起こし中国経済を混乱に陥れ、さらに現地の物資の調達にも偽造紙幣を使うという経済戦争効果を狙ったものだった。一九四〇年くらいになると内閣印刷局の技術者や東京美術学校出身の彫刻師、凸版印刷の技師など優れた人



戦時中中国紙幣用紙を抄造した「抄紙部」跡地。現圃本保育園。

材と民間企業、巴川製紙、凸版印刷、特種製紙などの協力を仰ぎ、本格的に偽札製造を目指す。しかし、法幣は英米の最先端の偽造防止技術が施されていたために、なかなかうまくいかなかった。特に「黒透かし」は難しかったが、試行錯誤の上、じき法幣とほぼ同水準の偽札が作られるようになった。さらに一九四二年の十二月、日本軍は香港を占領。香港にあった中国造幣所から持ち帰った印刷機原盤で法幣が大量に製造できるようになった。偽造法幣の発行残高は、一九四二年…三千万円(円)、四四年…十三億元、四五年…四十億元で、このうち二五億元が使われたとされている。当時の国家予算が二百億円で、これだけの規模の偽札製造は世界でも最大規模だという。新札は信用されないため、紙幣はクシャクシャにし、時にはニクニクの臭いなどもつけ、毎月中野学校出身者が極秘に、長崎→上海、神戸→上海、舞鶴→釜山・中国東北ルートで運んだ。効果はと言えば当初はともかく、日本が予想していた以上のインフレが起こり、千円、一万元、十万元、百万元という具合に高額紙幣が発行され、日本が作っていた五元や十元の偽札は価値がなくなつた。一九四五年の法幣発行残高五五六九億元のうち、日本が作った偽札は四〇億元と一%未満に留まり、日本は経済戦争でも勝つことはできなかった。

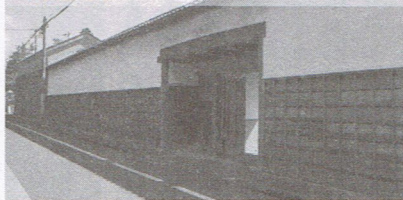
●第三科の越前疎開

戦争末期になると、本土決戦体制構築の一環

として、大本営の長野県松代移築計画にも、登戸研究所の疎開が検討される。主に長野県などが検討される中、偽札の第三科だけは福井県の越前和紙産地へということになった。

恐らく、日本で最も早い時期に藩札を作り、明治期には太政官札など「お札のふるさと」ともいべき技術力と信用のある地であること。明治初期、越前の職人らが上京し、日本の紙幣の基礎作りに貢献し、大蔵省との結びつきも深いこと。さらに当時中国紙幣をこの地で多く漉していたことも越前選定の理由に挙げられよう。一九四〇年、大蔵省は中國聯合準備銀行の紙幣十圓券を越前五箇の紙漉き業者に依頼。翌四二年、越前製紙工業組合は印刷局抄紙部の仕事を契約し、五圓券も漉き始める。その後、品質を統一するために四三年「抄紙部」という名称で、共同作業場を建設した。それが現在の岡本保育園の辺りで、「抄紙部跡地」という看板が立っている。その他、日本側の傀儡政権である汪兆銘政権の中央儲備銀行(ちゅうおうちよびぎんこう)のチョコビ券用紙も漉き、五圓は中国の紙幣をずっと漉いていた場所だった。

登戸研究所第三科「北陸分廠」の管理本部が置かれた武生製紙所跡地。長屋門のみが当時の面影を残す。



このような背景の下、製紙班長伊藤藤寛太郎は旧武生町(現越前市)周辺を第三科「北陸分廠」(ほくりくぶんぶんしょう)とし、原料不足のためあまり稼働していなかった大工場、武生製紙所を管理

本部に借り上げる。また西野製紙所(現在の福井特殊紙)の定友にあった第二工場と粟田部にあった旭工場を接収し、第二工場で印刷旭工場で製版をする計画であった。

一九四五年の春、登戸から人と機械が移動してくるようになった。当時粟田部へ越してきた「彩紋」というお札の幾何学模様を描く技師の川津敬介さん(栃木県在住)によると、三科最大二五〇人のうち半分くらいが来たのではという。移住者は、工場宿舍や民家の離れ、お寺の空き部屋などを借りて住んだ。地元の人には、音響の研究していると説明していたが入り口には「登戸研究所」の看板は掲げてあったそうだ。このように偽札製造の準備作業は進められていたが、八月十五日となり、実際には一枚の紙を漉くこともなく終戦となった。この日、陸軍から証拠隠滅の指令が発せられ、一斉に資料の焼却処分、証拠隠滅作業が行われた。蓄音機のようなものをこれ見よがしに置いておき、トラックに積んで日本海に捨てに行くななどの工作も行われた。残った機械類は民間の企業へ安く払い下げた。

偽札の印刷がされる予定であった西野製紙所第一工場跡地(現在、福井特殊紙敷地)



情報欄

●イベント情報

■ミラノ国際博覧会「紙漉き体験」

時:平成27年10月24日(土)~27日(火)
場所:ミラノ国際博覧会「日本館イベント広場」
内容:福井の食文化紹介 伝統産業PRイベント
越前和紙 紙漉き(青年部)

■平成27年度「伝統的工芸品月間国民会議全国大会・富山大会」関連

・第32回伝統的工芸品月間国民会議全国大会(式典)

時:平成27年11月5日(木)13:30~14:30
場所:高岡市 高岡市民会館

・第34回全国伝統工芸士大会(式典)

時:平成27年11月5日(木)14:45~15:45
場所:高岡市 高岡市民会館

・第34回全国伝統工芸士大会(懇親会)

時:平成27年11月5日(木)18:30~20:30
場所:雨晴温泉 磯はなび

・2015 伝統工芸ふれあい広場・とやま
時:平成27年11月6日(金)~8日(日)
10:00~17:00(最終日は16:00まで)
場所:高岡テクノドーム
※越前和紙は「墨流し体験」で参加します。

・2015 全国くらしの工芸展・とやま
時:平成27年11月6日(金)~8日(日)
10:00~17:00(最終日は16:00まで)
場所:高岡テクノドーム

■第3回恐竜クラフト展
時:平成27年11月26日(木)~29日(日)
場所:福井県立恐竜博物館

●第23回 和紙文化講演会(和紙文化研究会主催)

「明らかになってきた古文書・古典籍の料紙」
時:平成27年11月7日(土)10:00~17:00
場所:東京芸術大学美術学部第一講義室
参加費:3,500円(詳細は和紙文化研究会HP)

●レンブラント版画名品展

作品に越前和紙を使ったとされる17世紀のオランダの版画家レンブラントの代表的な版画作品30点展示(レンブラントハウス美術館所蔵)



時:平成27年10月2日(金)~11月8日(日)
場所:福井県立美術館
観覧料:一般500円

編集後記

今年は和紙に関わる戦後70周年企画で、先に登戸研究所の風船爆弾を取り上げましたが、今回は偽札の秘話を取り上げることができました。(よ)

季刊・和紙だより 第48号(2015年秋号) 発行日:2015年10月20日 和紙だよりURL→<http://washidayori.jimdo.com/>

発行人:福井県和紙工業協同組合 石川浩 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所:Office YOMOSA 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載は断ります。